



てんかんの診断と治療経過の判断に欠かせない脳波検査の波形をモニターで確認する榎教授。てんかんには特徴的な波形が現れる。

Pediatrics



榎 日出夫 教授
Enoki Hideo

■ 専門医
日本小児科学会小児科専門医、
日本小児神経学会小児神経専門医、
日本東洋医学会漢方専門医

生まれ育った岡山に昨年12月に戻ってきました。久しぶりの岡山は以前に比べてとても榮えていて活気があり驚きました。山登りが好きなので、これから岡山の山も楽しみたいですね。



ハンマー（打鍵器）で刺激を与えて反応を診たり、患児が人差し指で空中を指さしてから自分の鼻に触れる指鼻試験など、神経学的な診察は動きが伴うのが特徴。



小児科の医師で頭痛の専門知識を持つ医師は、全国でも数少ない。個々に合う漢方薬を見極めるのも日本東洋医学会漢方専門医の技術。

医療最前線

》》vol.85

川崎医科大学附属病院
小児科

Report!

専門医が行なう、子どもの未来を見据えた頭痛やてんかんの治療

多様な専門分野を有する医師が、連携しつづ、全人的治療を行なう。

「小児科は、内科や外科といった大人の診療科と異なり、子どもの全身の病気を診るのが大きな特長。当科では、感染症や遺伝、内分泌代謝、循環器、神経など、それぞれに専門分野を有する小児科の医師が、新生児から一五歳までの小児の治療にあたり、必要に応じて当院の医師同士で連携し複数の目で一人ひとりをサポートしています」。こう話すのは、小児神経を専門とする榎日出夫教授。これまで数多くの頭痛やてんかんの治療にあたってきた。

中・四国、九州地方では数少ない、小児科の医師で頭痛の専門知識を持つ榎教授。「頭痛は大人だけでなく多くの子どもも経験している病気で、いろいろな種類があり、原因も多岐にわたります」。大人の場合は治療法も使える薬も多いが、子どもは薬が大人よりも少ないため、その選択肢は限られている。そんななか、榎教授が子どもの慢性頭痛の治療で選択肢のひとつとして活用しているのが漢方医療。「体質や体力、冷え性が暑がりか、睡眠、食飲、性格までを把握し、それらに合う漢方薬によって全身の状態を整えることで、不調の一部である頭痛もおさまるのです」。実際に担当した患児のなかには、二年間さまざまな医療機関で治療を受けてもおさまらなかつた慢性頭痛が、わずか一ヶ月の漢方治療でおさまったケースもあるという。

また、てんかんについて榎教授はこう話す。「現在は優れたてんかんの薬が約三〇種あります。大人では長期間にわたって治療の継続が必要ですが、子どもの場合は数年間の投薬治療によつて過半数が通院から卒業できます」。しかし、薬の種類が多いゆえに、医師が個々に適切な薬を選定できるかどうかが重要だという。「成長・発達の上にある子どもの一年は貴重ですし、その時期を発作が止まらない状態で過ごすことはハンディキャップになります。投薬治療で症状がおさまらない子どもは外科治療によつて症状が改善することもあるので、医師が薬の効果を見極めて治療方針を判断するタイミングも大切です」と榎教授は話す。

慢性頭痛やてんかんの患児の半数近くは、生涯にわたつて病氣とつきあわなければならない可能性がある。「今日の苦しみを取り除くだけでなく、女児であれば将来妊娠したときに飲めないような薬を出さないなど、大人になったときに困らない治療方針を固めることも小児科の医師としての務めです」。真摯な表情で語る榎教授をはじめとする小児科の医師たちは、子どもたちの未来の幸福を念頭に今日も治療に取り組んでいる。

お問合せ
川崎医科大学附属病院
倉敷市松島577
☎0864621111
<https://h.kawasaki-m.ac.jp>